
The Tools of Western Civilization in Fukuzawa Yukichi's Travel Notes - Focusing on "Seiyo Jijo" and "Seiyo Ryoko Annai" -

Dr. Hassan Kamal Harb (Cairo University)

Abstract:

One of the challenges that Japan faced in the 19th century was how to react and accept the impact of western military power and civilization. In particular, Japan was forced to face new order and knowledge which were completely different from those in traditional Japanese society, specifically modern natural sciences such as Western medicine, physics, astronomy and mathematics, which differ from Japanese traditional literary knowledge which has taken root in the hearts of the Japanese. There was an area in which thinkers of Enlightenment could play an active role. Among them, Fukuzawa Yukichi (1835-1901) who is considered one of the representatives of Japanese modernization. The influence of Fukuzawa, from the end of the Edo period to the Meiji period, has been extensive in education, economy and politics. He played an important and comprehensive role in shaping modernization in Japan.

This paper is an attempt to grasp a characteristic of Japanese modernization by tracing the Fukuzawa's methods of introducing the tools of civilization to the Japanese in his writings "Seiyo Jijo" (1866) and "Seiyo Ryoko Annai" (1867). The author examines these travel notes, tracing Fukuzawa's interests in tools of modern civilization. In addition, the author explores the criteria of Fukuzawa in introducing these tools to the Japanese, and his evaluation of the western civilization in general.

This study is divided into two chapters. In the first chapter, the author summarizes the previous studies concerning the travel notes of Fukuzawa, specifically the ones that dealt with his evaluation of the tools of modern civilization. In the second chapter, the author examines Fukuzawa's views of the West in his writings, namely "Seiyo Jijo", and "Seiyo Ryoko Annai".

By examining Fukuzawa's introduction of the tools of modern civilization, using unique illumination methodologies, a characteristic of Japanese modernization at the end of the Tokugawa period and the beginning of the Meiji period will be clear. The first characteristic of Fukuzawa

enlightenment is the fulfillment of the requirements of Japanese society on introducing new knowledge. The second characteristic is that Fukuzawa was acting in line with his own beliefs during this period, despite his position as a bureaucrat in the government. The third feature is the variety of Fukuzawa's information sources. He did not depend only on his travelling notes, but he also western books in order to make sure of the correctness of this information.

Keywords :

Western Civilization, Travel Notes, Fukuzawa Yukichi, "Seiyo Jijo", "Seiyo Ryoko Annai", Enlightenment

ملخص:

أدوات الحضارة الغربية في مذكرات السفر لفوكوزاوا يوكيتشي

مع التركيز على "أحوال الغرب" و "دليل السفر إلى الغرب"

أحد التحديات التي واجهت اليابان في القرن التاسع عشر هو كيفية التعامل مع القوة العلمية والعسكرية للحضارة الغربية، حيث وجد اليابانيون أنفسهم في مواجهة مع نظم اجتماعية واقتصادية وغيرها من أدوات الحضارة الحديثة والتي تختلف تماما عن ما ورثوه من نظم وأدوات تقليدية في المجتمع الياباني. تأتي على رأس هذه الاختلافات، المعارف والتقنيات الحديثة التي نتجت عن تطور العلوم الطبيعية الحديثة مثل الطب والفيزياء وعلم الفلك والرياضيات والتي لا تجد لها مكان في عقول غالبية اليابانيين في ذلك الوقت. في تلك الفترة، ظهر جلياً أهمية دور مفكري التنوير والذين يمكنهم تقديم هذه الأدوات لليابانيين. يعتبر المفكر الياباني الشهير فوكوزاوا يوكيتشي (١٨٣٥-١٩٠١) أحد أهم مفكري التحديث الياباني والذي امتد تأثيره منذ نهايات عصر إيدو وحتى نهايات عصر مييجي، في مجالات التعليم والاقتصاد والسياسة.

يلقي الباحث، في هذه الدراسة، الضوء على أهم سمات التحديث الياباني من خلال تتبع أساليب فوكوزاوا في تقديم أدوات الحضارة الغربية لليابانيين في كتاباته وخاصة كتاب "أحوال الغرب" (طبع عام ١٨٦٦) وكتاب "دليل السفر إلى الغرب" (طبع عام ١٨٦٧). يقوم الباحث بفحص مذكرات فوكوزاوا خلال رحلاته إلى أوروبا وأمريكا، متتبعا اهتمامات فوكوزاوا

بأدوات الحضارة الحديثة، مستكشفًا معايير فوكوزاوا في تقييم الحضارة الغربية بشكل عام وكيفية تقديمها لليابانيين.

تنقسم الدراسة إلى فصلين. في الفصل الأول، يتناول الباحث الدراسات السابقة المتعلقة بمذكرات سفر فوكوزاوا وتحديدًا تلك التي تناولت تقييمه لأدوات الحضارة الحديثة. في الفصل الثاني، يفحص الباحث آراء فوكوزاوا عن الغرب في كتاباته بشكل عام، وفي كتابيه "أحوال الغرب" و "دليل السفر إلى الغرب" بشكل خاص. تمكن الباحث من خلال تحليل هذه الكتابات مع الإشارة إلى الاهتمامات الخاصة بفوكوزاوا بأدوات الحضارة الحديثة من تبيان سمات الفكر التنويري لفوكوزاوا والذي يشكل جانب من ملامح التحديث الياباني في ثغيات عصر طوكوغاوا وخلال عصر مييجي. السمة الأولى للفكر التنويري عند فوكوزاوا هي إدراكه الواضح لمتطلبات المجتمع الياباني عند تقديم المعرفة الجديدة. لذلك نجده في هذين الكتابين ينتقى بطريقة عملية ما يفيد في تحديث المجتمع الياباني ويتعد عن ما قد يسبب الجدل والرفض أو النفور بين اليابانيين. السمة الثانية هي أن فوكوزاوا كان يتصرف بما يتماشى مع قناعاته الخاصة رغم أنه كان موظفًا في الحكومة اليابانية آنذاك وهو ما سبب له بعض المضايقات من جهة بعض أفراد الحكومة عند معارضته لبعض القرارات. السمة الثالثة هي تنوع مصادر معلومات فوكوزاوا، حيث نجد أنه لم يعتمد فقط على مذكراته في السفر، بل قام بالتأكد من صحة هذه المعلومات من خلال الاطلاع على الكتب الغربية الشهيرة.

الكلمات المفتاحية:

الحضارة الغربية ، مذكرات السفر، "أحوال الغرب"، فوكوزاوا يوكيتشي، التنوير

福澤諭吉の見聞記における西洋文明の利器—『西洋事情』と『西洋旅行案内』を中心に—

ハサン・カマル・ハルブ(カイロ大学文学部)

はじめに

19世紀において、日本が直面した問題の一つは、西洋の軍事力や文明に対する衝撃への対応の仕方、および受容の仕方であった。特に、従来の伝統的な社会で通用した諸秩序や知識とは全く異なる新たな秩序と知識への対応に迫られたことである。具体的には、日本人の心に根付いてきた儒学と国学とは異なる、西洋の医学や物理学、天文学、数理学などの近代自然科学と、法律、政治、経済、歴史といった人文・社会科学などの知識である。そこに啓蒙思想家が活躍できる領域があった。中でも、日本の近代化の代表者の一人である福澤諭吉(1835-1901)は、幕末から明治時代において、経済、政治、教育など多岐に渡った近代化形成に大きな役割を担ってきた。

本論は、日本が近代化への道を歩み始めるにあたり、どのような西洋の情報が紹介されたかを理解する試みとして、『西洋事情』と『西洋旅行案内』に掲載された見聞記に焦点を当てる。とりわけ、福澤が西洋を旅した際に、どのような文明の利器に興味を持ち、それをどのように日本人に紹介したかを探る。また、福澤がいかなる基準を持って、西洋を見聞し、その文明の利器を評価したかが興味深い点である。本研究の構成は二章に分ける。第一に、福澤の西洋見聞に関する従来の研究を整理する。第二に、『西洋事情』と『西洋旅行案内』における福澤の西洋見聞を検討・考察する。ここでは、基本的に文献を重視し、全て原文を用いる。基本資料を確定した後、福澤が紹介した文明の利器を追求する。彼の啓蒙の特徴を考察することを通して、幕末時代と明治初期における日本の近代化の一端が把握できるのではないかと考えている。

第一章：福澤の見聞記に関する先行研究

福澤が欧米で見聞したことに関する先行研究は少なくなく、様々な角度からその内容が取り扱われている¹。しかし、『西洋旅行案内』に関する先行研究は少ないので、本章では、西欧における福澤の見聞

記、とりわけ『西洋事情』の見聞に関する先行研究を追求する。

杉山伸也氏(2019)は、「福澤諭吉と文明開化」にて福澤諭吉の文明思想を1860～70年代の前期福澤と80年代以降の後期福澤に分け、彼の思想を統一的に理解しようとしている²。前期福澤は、一般人や学生、知識人、僧侶や儒学者等、幅広い読者層を対象に、啓蒙の観点から「俗文俗語主義の比較的ストレートでわかりやすい表現が多く用いられている」と述べている³。杉山氏は、福澤が西欧へ渡来する前に受けた西洋教育について、以下のように述べている。

1854年に長崎に遊学し、蘭学を学んだことにはじまり、翌年に大坂の緒方洪庵の適塾に入門し、本格的な蘭学修業を開始した。そこで、医学や、物理学、化学などの原書を読み、当時の最先端の基本的知識を習得したことは、彼の功利的な思考方法の形成に大きな影響をおよぼした。⁴

杉山氏は続いて、福澤が幕末時代に欧米に渡った体験について詳細に述べている。まず、1860年に米修好通商条約批准書交換使節団とともに派遣された第一回目について、彼は「「社会上政治上経済上の事は一向分らなかつた」ものの、市街地や人々の生活、咸臨丸修理のためのドライ・ドックなどに関心をよせ、また「鉄の多い」ことに気づき、「鉄は丸で塵埃同様に棄てゝあるのでどうも不思議だと思ふた」と述べている⁵。次に、1861年に遣欧使節団の翻訳方として幾つかの欧州を巡行した際について、『福翁自伝』から以下の言葉を引用している。

日本に帰てからソレを台にして尚ほ色々な原書を調べ又記憶する所を綴合せて西洋事情と云ふものが出来ました。凡そ理化学、器械学の事に於て 或はエレクトルの事、蒸汽の事、印刷の事、諸工業製作の事などは必ずしも一々聞かなくても宜しいと云ふのは元来私が専門学者ではなし聞たところが真実深い意味の分る訳けはない唯一通りの話を聞くばかり、一通りの事なら自分で原書を調べて容易に分るからコンナ事の詮索は先づ二の次にして外に知りたいことが沢山ある。⁶

続いて杉山氏は、『西洋事情』について以下のように説明している。

『西洋事情初編』において、福澤は、「経国の本」は、「文学技芸」にではなく、「政治風俗」にあるとして、各国の個別史を論述するに先立って、「西洋一般普通の制度風俗」について検討する。福澤は

、「政治」からはじめ、「文明の政治」の6条件として「自主任意」、信教、技術 文学、教育、政治の保任、貧民救済をあげ、第1条の「自主任意」では、「国法寛にして人を束縛せず、人々自から其所好を為し..... 毫も他人の自由を妨げずして、天稟の才力を伸べしむるを趣旨とす」と指摘し、以下、収税法、国債、紙幣、商人会社、外国交際(外交)、兵制、文学技術、学校、新聞紙、病院、文庫(図書館)・博物館・博覧会、病院、貧院・啞院・盲院・癩院・痴児院、最後に蒸気機関、蒸気船、蒸気車、電信機、瓦斯燈の23項目について簡潔に紹介している。⁷

また、『西洋事情』が20-25万部販売されたことについて、同書が日本人の間で幅広く読まれたという意味を持つとともに、『西洋事情』が当時の社会的な状況と人々の関心に適合したという意味に繋がると指摘している⁸。

ファム ティ トゥ ザン氏(2013)は、「ベトナムと日本の近代における「文明開化」」にて、福澤諭吉とファン・ボイ・チャウにおける文明開化の観念を比較しつつ、両者の啓蒙思想の特徴を明らかにしている⁹。その中で、本稿と密接に関連する箇所を選抜し参考する。ファム ティ トゥ ザン氏は、福澤の教育背景と西洋との接触について以下のように述べている。

福澤諭吉の場合、頭もよく、堅実で、正義が好きな人物であったが、それ以上に、時代の変化に敏感な人でもあった。21歳の時に、故郷の中津は時代遅れで箱のように閉鎖的な世界であるといち早く気づいたため、中津を去り漢学をやめて、「横文字」を習得しに長崎へ出かけた。幸いにも、後に大阪で蘭学の大家である緒方洪庵に出会って、人生の転換期を迎えた。福澤は緒方洪庵の人格と学問に惹かれ、洋学に夢中になった。しかし、大阪だけでは満足できず、江戸に出向いた。ある日横浜へ出かけ、英語で書かれている看板を見てすぐさま、オランダ語ではなく英語の時代になっていると気づいた。蘭学がまさに盛りで誰も英語の必要性などに気づかない時代の中であって、福澤のこのような発見は、彼の歴史的転換に対する敏感さを表している¹⁰

また、福澤が三度に渡り西欧へ渡航したことは、西洋文明への関心の高さを示していると述べている。本稿に関連する内容として取り上げたいのは、福澤が 1862 年にロンドンから中津の友人に送った手紙の箇所である。そこには、イギリスとフランスの政治制度や諸施設、税金等について語られており、富国強兵を日本の急務とすべきであると述べている。その富国強兵を実現するためには、漢学ではなく、西洋式の教育の応用が必要であるとすすめている¹¹。

井田進也氏(2007)は、『海国図志』と『滅環志略』、『西洋事情』を対象とし、幕末維新时期日本における仏蘭西観の形成について論じている¹²。井田氏は『西洋事情』刊行の意義について、「一人これを語れば万人これに応じ、朝に野に苟も西洋の文明を談じて開国の必要を説く者は部の西洋事情を座右に置かざるはなし」という福澤の言葉を参考にしつつ、同書の内容や広い普及による膨大な影響について考察している¹³。

区建英氏(1993)は、加藤弘之と福澤諭吉の早期の著述『隣州』と『西洋事情』を対象とし、近代日本の新しい思想や価値観の形成を論じている¹⁴。彼は、『隣州』と『西洋事情』は共に外国の情報を提供する著作であるが、各々の方針が異なっていると示している。前者は中国批評の形を採った西洋政治の紹介であるに対し、『西洋事情』は西洋を紹介した著作であると指摘している¹⁵。また、福澤の西洋渡航経験とその見聞記を紹介しつつ、『西洋事情』は福澤が理解した西洋理解を体格化するものであると論じている¹⁶。区建英氏は、両者の思考法の特徴を次の三点に概括している。第一は、二人は「東洋道徳、西洋芸術」という象山以来の本末観を克服したが、「本」を西洋の政治の「術」という次元に設定した加藤の視点に対照し、福澤は西洋文明全体の発生する根元という一次元に「本」を設定したとの主張である。第二に、二人の共通点として、強い日本を築くため西洋文明を導入する必要性を信じたことである。第三は、西洋文明の優越性を素直に認めた点である。しかしこの考察にあたり、筆者は異なった見解を持つ。福澤は当時の多くの日本人と同じく西洋の優越性を認めていたが、彼の特徴はこの優越性は普遍的ではなく、暫定的であると考えていることである。何故なら、福澤は時間、場所及び状況を考慮に入れつつ、肯定と否定の範囲外で相対的に道を築く人格者だからである¹⁷

。区建英氏は最後に、明治維新後における両者の思想的変化について次のように述べている。

加藤は、政府の開明的傾向と一致し、曾て啓蒙の活動に励み、一時期に天賦人權論の思想的代表にもなった。しかし後に、政治統合の緊迫性と、国民を政治の主体として確立する緩慢性とのジレンマが顕在化した時に、天賦人權論を放棄し、優勝劣敗の進化論に転向するようになった。それは原理を変更する変化であり、思考方法における経験的機会主義と言える。これに対照し、福澤は、加藤と相似の現状認識を持ち、現状に合わせて具体的主張を変えていくにもかかわらず、「一身独立して一国独立」という理念を終始堅持した。福澤の変化は原理の変化ではなく、「処方筆」の変化である。¹⁸

上記で触れてきたように、西欧における福澤の見聞を取り扱っている先行研究は殆ど『西洋事情』を対象としていることが明らかになった。一方、幕末期に大ヒットベストセラーとなった『西洋旅行案内』に関する研究は稀である。また、『西洋事情』においても、文明の利器に対する福澤の啓蒙の仕方についての研究は数少ないことが明らかである。次章では、『西洋旅行案内』等を通して、福澤における文明の利器の啓蒙の仕方を明らかにする。

第二章：福澤における西洋の見聞記

本章では、福澤の著作の『西洋事情』と『西洋旅行案内』における文明の利器について追求する。そこでは、彼が西欧へ渡来した際、西洋文明の利器のうち何に、またどのような関心を持ち、帰国後それらをどのように紹介したかを考察する。

2-1. 『西洋事情』の見聞記における文明の利器

福澤の全集を見ると、1870年頃までの著作の主な特徴は西洋文明における技術や諸制度などの紹介を目的としている。その代表作が『西洋事情』であり、1866年、1868年、1870年に出版された同書三巻の基礎は、福澤が欧米への渡来で収集した情報であった。第一巻では、新聞や図書館、政府機関、孤児院、美術館、蒸気船、電信について紹介されている。また、米国、オランダと英国の歴史、政府、軍事システム、財政についての説明も見られる。第二巻では、英国のチャン

バースの教科書からの翻訳が含まれ、文明社会を構成する諸秩序について解説されている。第三巻では、人権に関するブラックストーンとウェイランドの執筆書を紹介し、税金についてや、ロシアとフランスの歴史が説明されている。

『西洋事情』の初編では、政治、収税法、紙幣、外国交際、兵制などが紹介され、また「文学技術」や、「学校」、「啞院」、「盲院」、「博物館」、「蒸気機関」、「蒸気船」、「蒸気車」、「伝信機」、「瓦斯燈」等の各項目について解説されている。福澤は、同書の内容に関して、西洋での見聞からだけでなく西洋書から得た知識も加えられたものであると、以下のように示している。

欧羅巴に航して現に聞見せし所のものを手録し、傍ら経済論等の諸書を引て編輯するものなり。但し吾欧羅巴の旅行と雖も僅か期年を踰えざれば、固より一時の観光のみにて、詳に彼国の事情を探索するに暇あらず。故に又伝聞の誤謬事件の遺漏なきこと能わず。是の如きは唯後來博雅の訂正を待つのみ。¹⁹

幕末明治初期の日本人は欧米諸国についての知識はあったが、断片的で、西洋に関する最新の情報が含まれる書籍が少なかった。このような状況の中、福澤は、欧米社会についての紹介に力を入れ、次々と著書を刊行していった。例えば、『西洋事情』は装飾もせず急ぎまとめ、「唯一時新聞紙の代用に供するのみ。故に浅日急成し、疎漏杜撰の罪遁るゝに所なしと雖も、読者冀くは余が意を体し、文字に拘泥せずして主意の大概を失うことなくば則ち幸甚し。」と述べ、堅苦しい表現や言葉遣いを避け、万人にわかりやすく伝わる事を目的に執筆したと記述している²⁰。これは本編翻訳の校正の折に、本の内容に修正が加えられればより素晴らしい本になると友人から注意されたというエピソードに対する反論である。そして、使用した文体に関して、「洋書を訳するに唯華藻文雅に注意するは大に翻訳の趣意に戻り。乃ちこの編、文章の体裁を飾らず勉めて俗語を用いたるも、只達意を以て主とするが為めなり。然るに今之を某先生に謀るも、徒に難字を用い、読者をして困却せしむるの外、決して他事なかるべし。」と述べている²¹。また福澤は、西洋由来の知識の普及が著しく、洋書を学ぶ者がどんどん増加しているので、数年後には殆どの日本人が原文を理

解することができるようになるだろうと述べている。上記をまとめると、福澤の西洋への関心には二点あると考えられる。一点目は、彼自身の好奇心に基づいている。二点目は、時代の変化に伴い日本人に必須であるとする西洋の近代的知識を啓蒙する点である。

また、見聞記における福澤の特徴の一つは文章と共に内容を説明する図版を用いることである。例えば、『西洋事情』の口絵である。その図版は二つの解釈をすることができる。第一に、欧米に渡来した福澤が最新の知識を日本人に伝達するため地球を巡行している姿が描かれているように見える。第二に、図版の中央には大きく地球が描かれ、周りに張られた電信線の上を走る郵便夫が電信を用いて最新の情報を即時に伝達しているようである²²。このように、西洋の最新情報を一般の日本人に伝えるために図版を使用し、わかりやすい言葉と文体で内容を説明するのが福澤の啓蒙スタイルと言えよう。

次に、西洋文明が齎した技術や発展、例えば「蒸気機関」、「蒸気船」、「蒸気車」、「伝言機」、「瓦斯灯」に対する福澤の見聞記を参照する。「蒸気」とその「機関」に関しては以下のように述べている。

蒸気とは湯気なり。湯気に力あることは、鍋、釜、鉄瓶に湯を沸かしてその蓋を吹上るを見て知るべし。今一合の水を沸騰せしめ、次第に火力を強くしてその水全く蒸発し尽くるに至れば、一国七斗の蒸気となる。即千七百倍の容なり。蒸気機関とは、斯く非常に膨張する蒸気を捕えて密器中に封じその発力を藉りて機関を動かすものなり。その大略、密閉したる釜に石炭を以て湯を沸かし、その蒸気を細き管より「シリンドル」と云える筒に移す。この筒は水鉄砲のごとき仕掛けにて、筒の内に符合する鏢あり。鏢に心棒をつけて、心棒は筒の外に出て、鏢は筒の内を彼此に進退すべし。蒸気膨張の力を以て筒内の鏢を押し、一進一退、その力を心棒に伝えて機関運転の元となる。既に心棒の運動を起こせば、種々の仕掛けにて次第に力を移し、上下左右、進退円転、意の如くならざることなし。蒸気機関の力は「シリンドル」の大小に由て強弱あり。この強弱を馬の力に擬えて計算す。所謂蒸気の馬力なり。一馬力とは三万三千「ポンド」の重さを一分時間に一「フート」の高さに挙る力を云う。²³

そして 18 世紀にイギリス人のワットによって初めて蒸気機関が大成されたことを説明し、「凡そ川を浚え、水を汲干し、田地を耕し、山を掘り、銅鉄の荒金を製錬し、材木を鋸り、金物を製し、木具を造り、毛綿を紡績し、機を織り、紙を製し、版を摺り、砂糖を造り、麦粉を磨る等、大小の工作皆蒸気を用いざるものなし。」と追記している²⁴。西洋では蒸気機関の発明により一人の力で数百人分の成果が上げられ、費用の少ない製作物ができるようになったと説明し、「蒸気船」の例を挙げている。彼は、「蒸気船」はアメリカの発明であり、1807 年に 120 馬力の蒸気船を初めて試したところ 32 時間に 120 里走ることができたと紹介している。そして、「蒸気船」の使用について、最初は川船や内海の渡船として用いられたが、次第に改正が加えられ軍艦、商船、飛脚船となり、暴風激浪の大洋の往来が可能になったので、貿易が盛んになったと説明している²⁵。また、蒸気船を舳と艫を荷積の 3 つの場所に分け、船腹には機関を据え、船の両側には輪をつけて転回させて船を進め、蒸気を焚く石炭の煙は甲板上に突出させた煙出しで排出するという蒸気船のメカニズムについても解説している²⁶。そして、蒸気船の進行と可能な速度及び期間について、以下のよう述べている。

蒸気船の進行は機関の大小に由て遅速あり。大凡一昼夜に百二、三十里乃至三百四、五十里を走る。その最も軽便なるものは飛脚船なり。飛脚船は人の商売品を積み旅客を乗せて諸処に往来す。大抵帆前を用いず蒸気のみにて走り、風の順逆に拘わらず着発必ず日を限る。欧羅巴より日本、支那等の間に往来するものは英仏商社の船にて、往来の間、諸処の港に寄て船を替え、宿次ぐにて彼此に達す。日限を誤ることなし。大抵日本より欧羅巴の地へは海路六十日にて達すべし。²⁷

次に福澤が挙げた例は「蒸気車」で、その力と機能について紹介しつつ、「機関車一輛を以て他の車二十輛乃至三、四十輛を引くべし。一輛の車に人数二十四人を容るその製作重大堅牢、四個の鉄輪にて走るが故に尋常の道を行くべからず。必ず之が為道を平にし、車輪の当る所に幅二寸厚四寸許の鉄線二条を填めて、常にこの上を往来す。」と詳細に説明している²⁸。そして、鉄道のコストと、彼が欧州で乗車した蒸気車の体験について、「文久壬戌の秋、余輩魯西亜の彼得堡よ

り仏蘭西の巴里斯に至るとき、その道程日本の里法にて七百五十里余あり。この道を二十一時の間に走れり。休憩の時刻を除くこの蒸気車は甚疾きものにあらず。英国にて最も急行の車は一時に五十里余を走る。蒸気車の発明も大抵蒸気船と同時代なり」と述べている²⁹。

続いて紹介するのは、「伝言機」と「瓦斯灯」である。「伝言機」については、「越列機篤児の氣力を以て遠方に音信を伝えるものを云う。越列機篤児の力は古来支那人の全く知らざる所にして、自から本邦人の耳目にも慣れず。之を簡約に弁明すること甚難し。」と述べている³⁰。伝信機の働きと機能については、以下のように詳細に紹介している。

此処に越列機篤児の仕掛を置き、彼処に鍛鉄の仕掛を設けて、此彼の間を銅線を張り、この線より越力を通ずれば、距離の遠近に拘わらずその氣忽ち鍛鉄に感じて他の鉄片を引く。随ってその氣力の流通を絶てばすなわち復之を放つ。斯くの如くして一通一絶、随意に鉄片の運動を起こすべし。既に鉄片の運動を得れば、その動機を針端に伝えて紙に、イ、ロ、ハ、ノ記号をし、これに由て音信を通ずべし。その神速なることを千万里と雖も一瞬に達。³¹

このように、福澤は実用的な言葉を心掛けつつ物理的に伝信の働きとその法則を解説している。続いて、ヨーロッパで見聞したものとして「ミヂカル・ミュヂエム」や「動物園」、「植物園」等について、以下のように紹介している。

動物園には生ながら禽獸魚虫を養えり。獅子、犀、象、虎、豹、熊、罽、狐、狸、猿、兔、駝鳥、鷲、鷹、鶴、雁、燕、雀、大蛇、蝦蟇、総て世界中の珍禽奇獸皆この園内にあらざるものなし。之を養うには各々その性に從て食物を与え寒温湿燥の備をなす。海魚も玻璃器に入れ時々新鮮の海水を与えて生ながら貯えり。植物園にも全世界の樹木、草花、水草の種類を植え、暖国の草木を養うには大なる玻璃室を造り内に鉄管を横たえ管内に蒸気を通じて温を取る。故にこの玻璃室内は嚴冬も常に八十度以上の温氣ありて熱帯諸国の草木にてもよく繁殖す。「メヂカル・ミュヂエム」とは専ら医術に属する博物館にて、人体を解剖して或は骸骨を集め或は胎子を取り、或は異病にて死する者あればその病の部を切取り、経験を遺して後日の為にする。この博物館は多く病院の内にあり。³²

上記から、福澤が西洋の技術や文化（図書館、博物館等）に目を配っていることが分かり、彼が西洋近代文明の何に注目していたかが把握できる。彼は、儒教的な教育を受けた後、日常生活に活用できる蘭学へと関心を移している。諸方洪庵の適塾で、オランダ語のみならず、物理学や化学、医学等も学び、最新の西洋出版物に触れている。

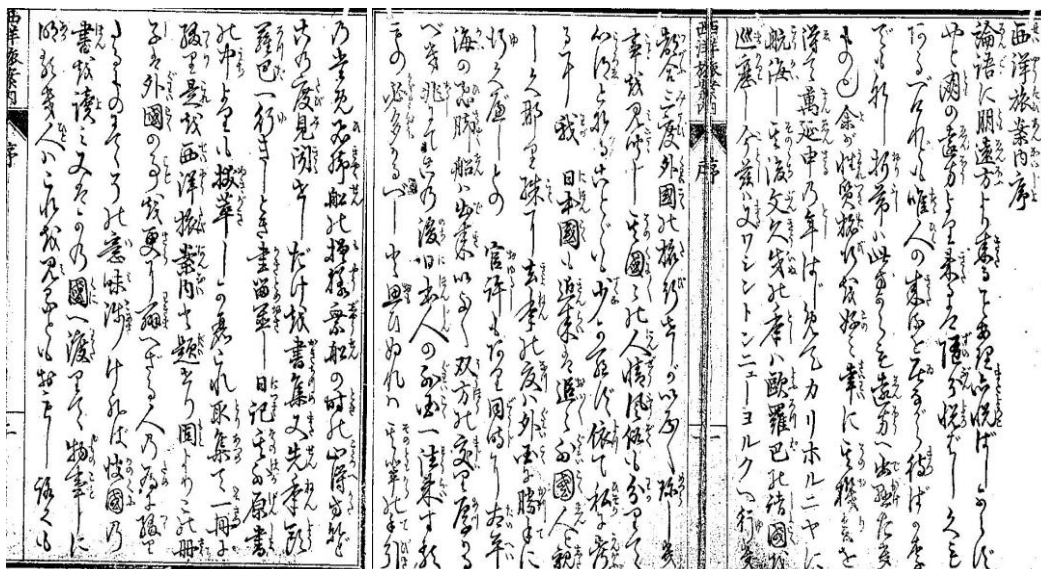
「ワンダーベルトと云う原書で、最新の英書を和蘭に翻訳した物理書で、書中は誠に新らしい事ばかり、就中エレキトルの事が如何にも詳に書いてあるように見える。」と述べている³³。福澤は、これらの出版物から知識を身につけたことにより、欧米に行かずとも西洋文明の事情の一面を把握していたと言えよう。1859年には英語の学習に取り組むようになり、英語による出版物が読めるまでになった。1860年以降になると、欧米への渡来で、西洋のあらゆる社会的秩序や、建造物と街並み、近代施設などを目の当たりにした。また、福澤が西洋の学問を学んだ適塾は基本的に医学塾であったため、欧州の巡航では病院などの医療機関に強い関心を示し、日本人の医療関係者に目新しい情報を提供することを目指していた。例えば、西洋諸国で見学した病院について、以下のように述べている。

病院は貧人の病て医薬を得ざる者のために設るものなり。政府より建るものあり、私に会社を結で建るものあり。英国及び合衆国にこの法最も多し私に建るものは、社中より王公貴人、富商大賈に説て寄附を請い、病院既に成る後も尚お年々定たる寄附の金高を集めて長く病院を持続す。又病院に入る者も、極貧の者は全く費を出さざれども、稍々産ある者は貧富に応じて医療の費を払う。各国の首府、都会には病院あらざる所なし。³⁴

福澤は、病院のあり方、病院の建設と設備や管理、診察などについて紹介しつつ、費用については次のように説明している。彼によれば、治療の全ての費用が政府の負担ではなく、裕福な人が寄付を出すことや、芝居や見世物等の娯楽の事業者が収益の4割を病院に納めること、患者が入院料の何割かを支払うこと等によって出来ていると説明している。また、その他の病院について、陸海軍の病院や貧困者の養老院、貧困者の乳児院、盲学校、聾啞学等があり、これらの運営の費用は政府によって出されていると追記している³⁵。

2-2. 『西洋旅行案内』の見聞記における文明の利器

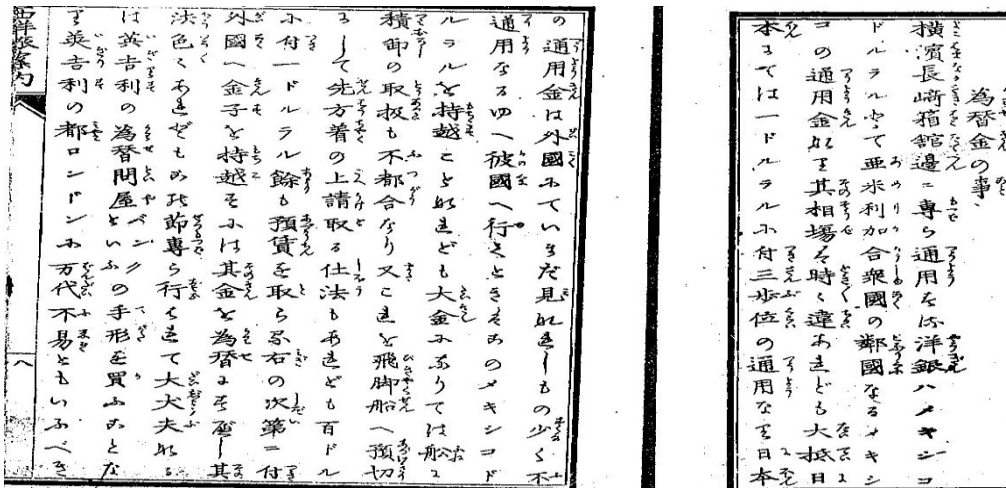
本節では、『西洋旅行案内』における文明の利器を明らかにする。同書は巻乃上と巻乃下からなる。前者では、「世界の地図」、「船賃払方の事」、「為替金の事」、「通用金相場の事」、「船中の模様」、「経緯度の事」、「世界中時候の事」、「印度海飛脚船の立寄場所」について紹介している。巻乃下では、「太平海飛脚船の立寄場所」、「商法」と「災難請合の事」について説明している。同書の執筆趣意については、以下のように述べている。³⁶



上記から、福澤は旅で見聞した珍しいものや、巡行した国々の人情風俗等を日本人に紹介する事を目的としている事がわかる。福澤は個人的に旅行が好きである事と、これまで鎖国されてきた日本人に開かれた世界を啓蒙する事を執筆の動機としている。江戸時代においては海外への渡航が不自由であったが、これからは自由に乗船し、外国人と親しんでも良いという時代になった。そこで、多くの日本人は今後外国へ赴き、外国人と接するようになるため、それらの国々と人々についての情報を提供すべく、ガイドブックの役割を担うよう同書を執筆したと述べている。福澤が提供した情報は、自身の経験や、旅行中につけていた日記、洋書で調べたことなどを基礎としているので、

外国に行ったことがない日本人にとって肝要な著書となると強調している。

「船賃払方の事」では、西洋文明の優越性の象徴である蒸気船とその戦略的な有効性について次のように説明している。産業革命による生産増加と新市場の需要により、これまでよりも効率の良い貿易を行う必要に迫られ、西洋諸国、特にイギリスとフランスの商人達は共同でアジアとヨーロッパを繋ぐ蒸気船による定期線路を開通した。それにより、日本・中国からヨーロッパまでは海上の天候に関わらず二ヶ月で行けるようになり、そこからアメリカまでは10日で到着するようになったと追記している。そして、「為替金の事」について次のように述べている。³⁷



福澤は、外国に渡来する際に直面する問題の一つとして、為替について取り挙げている。例えば、日本円は外国では通用しないので、横浜などの開港場で一般的に通用するメキシコ・ドルに両替する必要があるが、渡航費用分のメキシコ・ドルはかさばり荷物になるので、銀行の為替をすすめ、その機能と便利さについて紹介している。銀行為替とは、イギリスの幾つかの外国為替銀行は世界中に支店があり、外国に行く人が銀行の本部又は支店にお金を預ければ、その相場分のイギリス通貨ポンドの為替証書が発行され、それを世界中の支店に持って出せば正金と交換出来るというシステムを説明している。

前述したように、福澤が初めて西洋語を学んだのはオランダ語であり、またその学習を通して初めて西洋文明と接触した。だが、横浜に行った際、通ずると確信していたオランダ語が通用せず、「言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。所で今世界に英語の普通に行れて居ると云うことは予て知て居る。何でもあれは英語に違いない。今我国は条約を結んで開けかゝって居る、左すればこの後は英語が必要になるに違いない。洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない。」と英語の重要性について自覚した³⁸。その後、シンガポールと上海に行った時に、そこで労働していた中国人はみな英語を使用していた。「ジンガポウルの人の数凡六万人此内半分は支那の人にて本国より渡世に出しものなり此外印度海并に太平洋の島々サンフランシスコなどにも支那の人の住居する者多し然る所其者共外国人へ交るに支那の言葉は不通用なるゆへ英吉利の言葉を用ゆ」と述べている³⁹。また、「世間の様子を知ざる人が支那の文字は広く通用するよふに思ふ者もあれども心得違なり凡世界中に交易の行はるゝ港に英吉利の言葉の通用せざる所なし又西洋の内地に入ては仏蘭西の言葉を貴ざる国なしゆへに当時外国人に交り外国の模様を知らんには是非とも英仏の言葉を学ざるべからず」と、中国語が世界に広く通用する言語であるという従来から続く常識の誤解を正し、英語とフランス語こそが文明の言語であると強調している⁴⁰。

次に、西洋文明の利器の一つである蒸気機関についての記述では、アメリカ合衆国北部が発展の礎になったと指摘している。北部と限定している点については、「合衆国の内南の方の国々には百姓多く農業を勉め麦綿の類を作り北の方の国々には職人の業を専とし蒸気仕掛などにて色々の物を製し商売を励む風なり」⁴¹と述べ、北部には職人が多く、蒸気機関を含む文明の利器を発展させたことにより、南北戦争において勝利したと、その有効性について記述している。ここで福澤が着眼したのは、文明の利器の発展が戦争の勝利につながるという点であり、南北戦争の本質、つまり奴隷制存続を主張した南部が合衆国を脱退し、その制度を禁止した北部との間で戦争が起こったという原因について、全く関心を示していない事は興味深い点である。おそらく福澤は、日本人には関心がなく、理解が難しい奴隷制度についてより、近代文明の利器である蒸気機関の重要性を啓蒙することが国家の発展につながるとして優先していたと言えよう。

結論

『西洋事情』と『西洋旅行案内』から見る西洋文明の利器に対する福澤の関心には、いくつかの特徴が挙げられる。第一は、社会要請に適合した啓蒙の仕方をしている点である。彼は、西欧から帰国した後すぐに『西洋事情』や『西洋旅行案内』等にまとめ出版し、その内容を慶応義塾で教えていた。しかし、その背景には、欧米への渡来前から持つ豊かな知識があり、西洋文明の最新技術を説明するための基礎があった。さらに、彼はその知識を易しい文体でわかりやすく解説する能力を持っていたため、同書はいずれもベストセラーになったと言える。

第二の特徴は、この時期における福澤は、幕臣として官僚の地位にあったにもかかわらず、自身の信念に沿って行動していた。それを実証するエピソードは次の通りである。幕末の動乱で財政が悪化していた幕府は、国民に色々な課税をつけていた。その方針に沿った渡米使節団は、大量の洋書を買付け、日本で高く販売することを考えていた。それは、「一行中にも例の御国益掛の人が居て、その人の腹案に、今後日本にも次第に洋学が開けて原書の価は次第に高くなるに違いない、依て今この原書を買って持て帰て売たら何分かの御国益になろうと云う」と述べていることから明白である⁴²。その提案に対して、福澤は以下のように述べている。

私にその買入方を内命したから、私が容易に承知しない……私は商売の宰取りをするために来たのではない、けれども政府が既に商売をすると切て出れば、私も商人になりましょう。左る代りコミッション(手数料)を思うさま取るがドウだ。何れでも宜しい、政府が買った儘の価で売て呉れると云えば、私はどんなにでも骨を折て、本を吟味して値切て安く買うて売て遣るようになるが、政府が儲けると云えば、政府にばかり儲けさせない。⁴³

英語の教本を探しても見つけられず、苦勞し勉強してきた福澤は、上記の提案を到底承服することができなかった。彼は、全ての日本人が資金による弊害なく西洋の書物を読むべきであり、その知識を吸収する必要があると考えていた。このように、幕府使節団上層部の方針に従わなかった結果、帰国後幕府内で疎まれ、役職を解かれてしまったのである。しかしだからと言って、福澤が完全に当時の日本の経済的状况を考慮に入れたとも言えない。それは、彼が『西洋旅行案内

』の「序」にて、日本の開国に伴い、日本人はこれから外国に行く事が多くなるので、外国と人々に関する情報を提供するべきガイドブックとして同書を執筆したと述べている事から推測することができる。幕末であった当時の政治的に混乱した状況の中、悪化してきた経済と国民の資金力を考えれば、非常に高額であった欧米への旅行者はそれ程多くないだろう。

第三の特徴は、福澤が用いた情報源が多種多様であった点である。彼は欧米諸国を巡行した際、多くのものを見聞してきたが、見聞記を記すにあたりそこで獲得した知識と原書などを精査・分析し、実証性と信憑性に基づいて執筆したと以下のように述べている。

私の欧羅巴巡回中の胸算は、書籍上で調べられる事は日本に居ても原書を読めば分らぬ事は字引を引て調べさえすれば分らぬ事はないが、外国の人に一番分り易い事で殆んど字引にも載せないと云うような事が此方では一番六かしい。だから原書を調べてソレで分らないと云う事だけをこの逗留中に調べて置きたいものだと思て、その方向で以て是れは相当の人だと思えばその人に就て調べると云うことに力を尽して……夫れから日本に帰てからソレを台にして尚お色々な原書を調べ又記憶する所を綴合せて西洋事情と云うものが出来ました。凡そ理化学、器械学の事に於て、或はエレキトルの事、蒸汽の事、印刷の事、諸工業製作の事などは必ずしも一々聞かなくても宜しいと云うのは、元来私が専門学者ではなし、聞た所が真実深い意味の分る訳けはない。唯一通りの話を聞くばかり、一通りの事なら自分で原書を調べて容易に分るから、コンナ事の詮索は先ず二の次にして、外に知りたいことが沢山ある。⁴⁴

福澤は巡行中、書籍の内容で欧米人には当たり前のことであっても日本人には十分な理解がしづらい点を、直接尋ねていた。原書を読めば西洋文明についてあらかたの事は知ることができるが、西洋人にとって当然のことはわざわざ原書には書いておらず、日本人がそのような原書を読んでも西洋人と同じ理解が得られるとは言い難い。例えば、理化学や、器械学、電気、蒸気機関、印刷、諸工業の技術等については原書を調べれば分かるが、病院等の施設の運営方法や、銀行での金の出し入れ、郵便制度、国によって異なる徴兵制、政治上の選挙法、議院、政治政党等のあり方とその競争等については考えもつかないので、直接見聞する必要があった⁴⁵。

また福澤は西欧で見聞した近代医療の知識と獲得した情報も『西洋事情』や『西洋旅行案内』にまとめている。例えば、ヨーロッパの病院での体験を、「欧羅巴各国を彼方此方と行くにも……病院に行けば解剖も見せる、外科手術も見せる」と述べている⁴⁶。また、ロシアで箕作秋坪(1826-1886)と寺島宗則(1832-1893)と立ち合った手術について、「外科室に這入て見れば石淋を取出す手術で、執刀の医師は合羽を着て、病人をば俎のような台の上に寝かして、コロ、ホルムを臭がせて先ず之を殺して、夫れからその医師が光り耀く刀を執てグッと刺すと、大造な血が迸って医師の合羽は真赤になる、夫れから刀の切口に釘抜のようなものを入れて膀胱の中にある石を取出すとか云う様子であった」と説明している⁴⁷。彼は渡欧中、病院や福祉施設などを精力的に見学し、一般市民が病気やケガを治すことができ、入院療養もすることができる施設であることに興味を示し、その運営の仕方を日本に伝える事を志した。実用的で合理的なシステムを日本に紹介することを優先する一方、それらの施設でボランティアとして働く修道女に関心を示していたのは興味深い点である。

注

1. 例えば：安西敏三、「『西洋事情』における「文明」と「進歩」：福澤諭吉の歴史哲学研究序説（福澤諭吉研究一現状鳥瞰図 論文要約）」『福澤諭吉年鑑』第 31 (pp.138-139)、2004、安西敏三、「『西洋事情』における「文明」と「進歩」：福澤諭吉の歴史哲学研究序法學研究：法律・政治・社会』V.76,No.12(pp.221- 244)、2003、童偉鶴(報告), 西川俊作(補筆)、「〈福澤諭吉研究論文〉『西洋事情外篇』と『佐治芻言』：バートン『経済学』の翻訳書に関する比較研究」『福澤諭吉年鑑』第 26(pp.49-59)、1999、高橋弘通、「福澤思想の源泉としての『西洋事情』」『研究紀要』第 8(pp.85-97)、1999 年、進藤咲子、「福澤諭吉「西洋事情」-西洋文明の構造的把握（特集=続・日本人の見た異国・異国人--明治・大正期）-（明治時代の異国・異国人論）」『国文学:解釈と鑑賞』第 62(12)(pp.20-27)、1997 年、金泰俊、「外国への憧憬と祖国への回帰--兪吉濬の『西遊見聞』, 福澤諭吉の『西洋事情』との関連を中心に」『東京女子大学比較文化研究所紀要』第 58(pp.51-63)、1997 年、小鹿良太、「福澤諭吉の思想的源流を探る--『西洋事情外編』に見られる翻訳の問題」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 36(pp.351-360)、1996 年、村山紀昭、「福澤諭吉の西洋受容『西洋事情』外編の「人間交際論」」『北海道教育大学紀要』第 1 部 45(2)(pp.1-15)、1995 年、長尾政憲、「幕臣福澤諭吉の政治思想発展過程-「西洋事情」成立の背景として」『法政史学』第 39(pp.23-43)、1987 年、安西敏三、「福澤諭吉と W・ブラックストーン『イングランド法積義』：『西洋事情』第二編における導入にまつわる若干の問題」『近代日本研究』第 2(pp.357-396)、1985 年、飯田鼎、「福澤諭吉における民権とナショナリズムの形成--「西洋事情」と「学問のすゝめ」を中心に(島崎隆夫教授退任記念特集号)」『三田学会雑誌』第 75(3)(pp.283-297)、1982 年、飯田鼎、「西洋事情」と福澤諭吉の政治経済思想-チェーンバーズの経済書と福澤諭吉の思想形成(遊部久蔵教授追悼特集号)」『三田学会雑誌』第 71(5)(pp.671-687)、1978 年、間崎万里、「福澤諭吉の「西洋事情」」『史学』第 24(2/3)(pp.89(221)-105(237))、1950 年
2. 杉山伸也、「福澤諭吉と文明開化」『郵政博物館 研究紀要』第 10 号(pp.26-41)、2019 年、p.26

3. 上掲書、p.27
4. 上掲書、p.28
5. 上掲書、p.29
6. 上掲書、p.29, (福澤諭吉、『福翁自傳』、時事新報社、1899 年、pp.30-31(<http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a02/3>))
7. 上掲書、p.31
8. 上掲書、p.30
9. ファム ティ トウ ザン、「ベトナムと日本の近代における「文明開化」：福澤諭吉とファン・ボイ・チャウの「文明開化」観念を比較して」『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題：ベトナムシンポジウム 2013』(pp. 86-96)、2013 年
10. 上掲書、p.92
11. 上掲書、p.91
12. 井田進也、「幕末維新时期日本における“仏蘭西”観の形成：『海国図志』・『瀛環志略』から『西洋事情』へ」『専修大学社会知性開発研究センター歴史学研究センター年報：フランス革命と日本・アジアの近代化』4(pp.67-81)、2007 年
13. 上掲書、p.75
14. 区建英、「『隣艸』と『西洋事情』-西洋理解の思考様式の角度から-」『北大法学論集』第 41 号(1)(pp. 105-143)、1993 年
15. 上掲書、p.127
16. 上掲書、p.128
17. 上掲書、p.135
18. 上掲書、pp.135-6
19. 福澤諭吉、『西洋事情. 初編一』、尚古堂、1866 年、p.18(<http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a02/3>)
20. 上掲書、p.18
21. 上掲書、pp.17
22. 「福澤諭吉と文明開化」、p.32
23. 『西洋事情. 初編一』、p.102
24. 上掲書、p.103
25. 上掲書、p.105
26. 上掲書、p.105
27. 上掲書、p.107
28. 上掲書、p.108

29. 上掲書、p.109
30. 上掲書、p.112
31. 上掲書、pp.112-3
32. 上掲書、pp.95-6
33. 『福翁自傳』、p.162
34. 上掲書、pp.76-7
35. 上掲書、pp.77-8
36. 福澤諭吉、『西洋旅行案内. 上』、慶應義塾出版局、1867 年
、pp.3-5(<http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a02/3>)
37. 上掲書、pp.28-9
38. 『福翁自傳』、p.179
39. 『西洋旅行案内. 上』、pp.65-6
40. 上掲書、p.66
41. 『西洋旅案内. 下』、p.29
42. 『福翁自傳』、p.294
43. 上掲書、p.295
44. 上掲書、pp.234-6
45. 上掲書、p.236
46. 上掲書、p.231
47. 上掲書、p.234

日本語の参考文献

- 服部礼次郎、『慶応ものがたり—福沢諭吉をめぐって』、慶應義塾大学出版会 2001年
- 伊藤正雄、『明治人の観た福澤諭吉、慶應義塾大学出版会 2009年
- 池田勇太、『福澤諭吉と大隈重信—洋学書生の幕末維新』、山川出版社 2012年
- 井上哲次郎、『明治の思想家たち：哲学者が見た福沢諭吉・中村正直・渋沢栄一の宗教と倫理』、幕末明治研究会 2018年
- 小浜逸郎、『日本の七大思想家 丸山眞男/吉本隆明/時枝誠記/大森荘蔵/小林秀雄/和辻哲郎/福澤諭吉』、幻冬舎新書 2012年
- 丸山眞男、『文明論之概略を読む 上』、岩波新書 1986年
- 丸山眞男、『文明論之概略を読む 下』、岩波新書 1986年
- 丸山眞男、『福沢諭吉の哲学』岩波文庫 2001年
- 丸山眞男、『日本の思想』、岩波新書 1961年
- 大家重夫、『著作権を確立した人々—福沢諭吉先生、水野錬太郎博士、プラーゲ博士』、成文堂 2004年
- 杉田聡、『福沢諭吉 朝鮮・中国・台湾論集—「国権拡張」「脱亜」の果て—』、明石書店 2010年
- 渡辺俊一、『井上毅と福沢諭吉』、日本図書センター 2004年

英語の参考文献

- Alan Macfarlane, *Secrets of the Modern World: Yukichi Fukuzawa, Nimble Books LLC* 2011
- Albert M. Craig, *Japan: A Comparative View*, Princeton Univ Pr 2016
- Asataro Miyamori, *A Life of Mr. Yukichi Fukuzawa*, Wentworth Press 2016
- Karube Tadashi, *Toward the Meiji Revolution: The Search for "Civilization" in Nineteenth-Century Japan*, Japan Publishing Industry Foundation for Culture 2019
- Koichi Sakamoto, *Yukichi Fukuzawa who changed Japan: Founder of Keio university*, B08MXXQC3Y, English Edition Kindle 2022
- Jon Thares Davidann, *The Limits of Westernization: American and East Asian Intellectuals Create Modernity, 1860 – 1960*, Routledge 2018
- Masao Maruyama, *Studies in Intellectual History of Tokugawa Japan*, Princeton University Press 2014

- Marius B. Jansen, *Changing Japanese Attitudes Toward Modernization* (Studies in the Modernization of Japan), Princeton University Press 2015
- Marius B. Jansen, *Japan in Transition: From Tokugawa to Meiji*, Princeton Univ Pr 2016
- Merry E. White, *The Japanese Overseas: Can They Go Home Again?*, Princeton Univ Pr 2016
- Minhyuk Hwang, *Fukuzawa Yukichi's Bourgeois Liberalism: The Betrayal of the East Asian Enlightenment (Critical Political Theory and Radical Practice)*, Palgrave Macmillan 2020
- Richard Rubinger, *Private Academies of the Tokugawa Period*, Princeton Univ Pr 2016
- Tamaki N., *Yukichi Fukuzawa 1835-1901: The Spirit of Enterprise in Modern Japan*, Palgrave Macmillan 2001
- William George Aston, *Fukuzawa Yukichi (1909)*, Kessinger Publishing 2010